

## 第44回

### 小規模多機能型居宅介護の計画－食堂・居間－

近畿大学 建築学部  
准教授 山口 健太郎



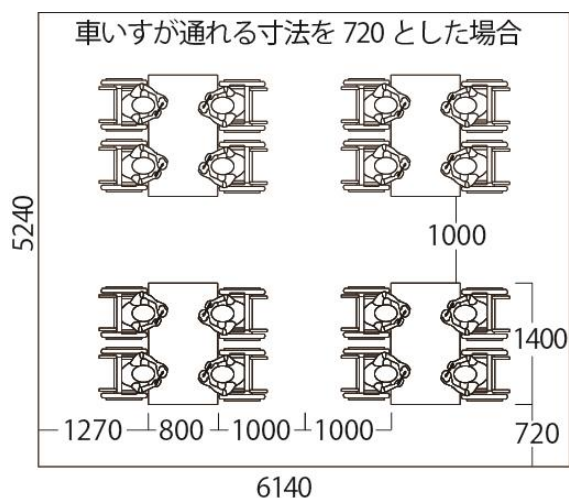
#### 【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

小規模多機能型居宅介護（以下、小規模多機能）の通い定員は、2015年に15名から18名に増加された。食堂・居間の計画は、18人分のスペースをどのように確保するかがポイントとなる。4人掛けテーブルを使用した場合の一人あたりの床面積は2.01㎡であり、18人分のスペースを確保するためには最低でも36㎡が必要となる（下図）。36㎡という面積を、1部屋とした場合には中規模デイサービスのよう空間となり、小規模多機能の原点である宅老所が目指してきた民家のような雰囲気から逸脱してしまう。食堂・居間の計画は、36㎡の面積を複数の部屋に分割する事が重要となる。

ここでいう「民家」とは、現在の日本人が生活しているnLDKタイプの住宅とは異なり、複数の畳の部屋で構成される田の字型プランを指す。田の字型とは、「田」の字に6畳から8畳程度の部屋が4つ集まったプランであり、部屋の境界はふすまで仕切られる。ふすまを開けると大人数でも利用でき、ふすまを閉



4人掛け机4台 (16人の場合)  
 $(6140 \times 5240) / 16 = 2.01 \text{ m}^2 / \text{人}$   
18人を想定する場合  $18 \text{ 人} \times 2.01 = 36.18 \text{ m}^2$



上図：ふすまで仕切られた食堂・居間  
(ケアタウンたちばな)

左図：1人あたりの食事スペース

めると少人数で集まることができる。2つの部屋が硬い壁ではなく、ふすまという可変性のある建具により区切られているため、空間の柔軟性が高い。さらに、畳という床材が、テーブルを囲む人数の柔軟性を高めている。フローリングの部屋では、いすの数（4人掛けテーブルであれば4脚）に部屋の利用人数が既定されるが、畳に座卓を用いる場合には、机が想定している以上の人が利用できる。席の移動も自由であり、部屋の中でさまざまな過ごし方ができる。

現代のnLDKタイプは、「寝室・子ども部屋+リビング+ダイニング+キッチン」というように各部屋の機能が単一であり、個々の部屋が独立しているため、部屋の柔軟性が低い。一方、民家は、居住だけではなく、冠婚葬祭など複数の機能をもつため、同じ面積でも部屋の柔軟性が高い。

この空間の柔軟性をうまく活用したのが、民家改修型の宅老所である。食事の時にはふすまを開けて広く使い、昼寝や雑談など時間は部屋を区切り小さく使う。また、食事の時間も昼食は大人数となるが、朝晩の食事は泊まりの人数だけの少人数となる。昼食時だけを考えた大空間は広すぎて、朝晩は落ち着かない。昼間の賑わいが去った後の夕暮れ時に、大空間の中で少人数の人がたたずんでいるというのは、物悲しい。高齢者の方の帰宅願望が強くなるのも領ける空間となる。田の字型であれば、部屋を区切り少人数で集まって過ごすこともできる。昼からの夜にかけて少しずつ使う部屋の数小さくし、灯りも暖色系へと変えていく。優しく包まれているような空間が落ち着きを与える。

このように、伝統的な民家は様々な機能に対応できる柔軟性・可変性を有しており、空間の包容力が高い。食堂・居間を計画する際には、「空間を小規模に区切る」「小規模な空間を可変的な建具で仕切る」「畳などユカ座になれる素材を使用する」という民家の利点を活かしながら、落ち着くことができる空間づくりを目指してもらいたい。



図 ケアタウンかみうち（福岡県大牟田市）小規模多機能居宅介護 部分  
キッチンを中心に2つのイス座空間を配置。各部屋は和室と隣接しており、ふすまで仕切られている。ふすまを開けると広い連続した空間となる。